

HAKA TA

博多 132

— はかた いせきぐん
博多遺跡群第178次調査報告 —

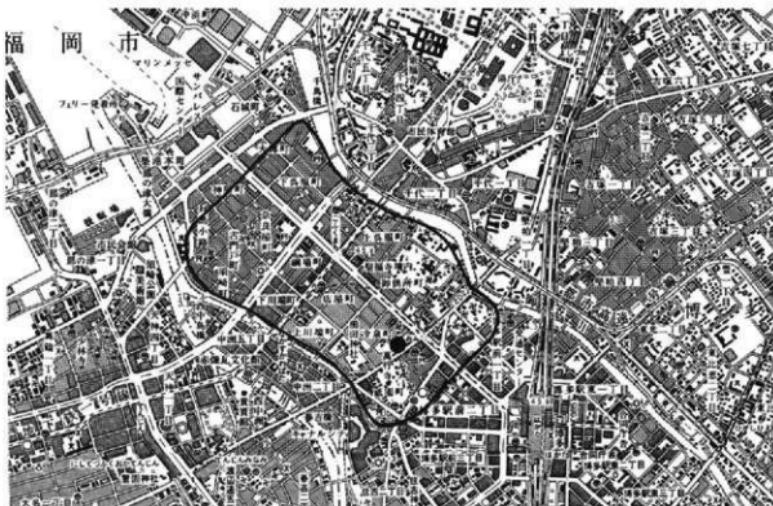


図1 博多遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

遺跡略号 HKT-178

調査番号 0748

分布地図 天神49

2009

福岡市教育委員会

博多132 正誤表

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1044集

頁 行		誤	正
3	7	23は合子身。黄橙色釉を外底部以外施釉。	23は合子身。黄橙色釉を外底部以外施釉。青白磁か。
5	18	須恵器がある。42は白磁碗Ⅶ類。	須恵器がある。48は土師器小皿。42は白磁碗Ⅶ類。
6	†	47~53は土師器。47~50は小皿。	47~49~53は土師器。47~49~50は小皿。 (※遺物48の土師器はSK04遺物です。)
7	11	85~89は龍泉窯系青磁皿類。	85~89は龍泉窯系青磁皿類。
16	20	180は朝鮮王朝の青磁碗小皿	180は朝鮮王朝の青磁小皿。

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。その証拠を示す貴重な文化遺産が市内には数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。

博多は大陸交易の窓口として古代から繁栄してきた地域です。博多地区での調査は昭和52年の地下鉄建設に伴う調査が最初です。以後急激に進む再開発に対して、本市は記録保存の調査を行い、文化財の保護に努めていますが、それらの調査によって博多が弥生時代から現代に至るまで連続として続く大遺跡であることが判明してきています。

本書は、博多区冷泉町内で計画されたホテル建設に先立って、平成19年度に実施した、博多遺跡群第178次調査の成果を報告するものです。調査では中世の集落跡を検出し、土師器を多量に発見した土師器廐棄遺構を検出しました。この土師器廐棄遺構は饗宴などに使用された土師器を持った遺構で、この地点が館の一角であることがわかりました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、申請者をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

凡 例

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成19(2007)年度に福岡市博多区冷泉町46番で調査を実施した発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、山崎龍雄が担当して行った。
- (3) 遺構・遺物の実測及び本文に使用した図の作成は山崎が行った。
- (4) 調査で出土した中世輸入陶磁器の分類については福岡市教育委員会『博多60』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第543号)(1997年)を基に行った。時期の比定については太宰府市教育委員会『太宰府寺跡跡XV-陶磁器分類編-』(2000年)を、また中世土師器の年代については山本信夫氏「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」『乙益重隆先生古稀記念論文集』(1990年)を参考にした。墨書きの判読は福岡市博物館学芸課 林文理・堀本一策両氏の協力を得た。
- (5) 遺構・遺物の撮影は山崎が行った。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ}30'$ 西偏する。
- (7) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (8) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (9) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

博多遺跡群第178次調査概要

遺跡名	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
HKT-178	0748	福岡市博多区冷泉町46番地	1002.27m ²	65m ²	ホテル建設	2007.10.15~10.31	山崎龍雄

本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに	1	1 調査の概要	2
1 調査に至る経過	1	2 第1面の調査	2
2 調査の組織	1	3 第2面の調査	18
第Ⅱ章 調査記録	2	4 まとめ	19

挿図目次

図1 博多遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)表紙	10
図2 第178次調査地点位置図 (1/6,000)1	11
図3 調査区配置図 (1/400)2	12
図4 第1面・第2面遺構全体図 (1/125)3	13
図5 各遺構図 I (1/40・1/50・1/60)4	14
図6 各遺構図 II (1/50)5	15
図7 SX02・SK46 (1/50)6	16
図8 SE08・09・11出土遺物 (1/3)7	17
図9 SK01・03～06出土遺物 (1/3)8	18
図10 SK07・10・15出土遺物 (1/3)9	19
図11 SK20・21・25・26・27・28出土遺物 (1/3)10	20
図12 SK33・35・36出土遺物 (1/3)11	21
図13 SK38～40・42～44・48・SX51出土遺物 (1/3・1/2)12	22
図14 SX02出土遺物 I (1/3)13	23
図15 SX02出土遺物 II (1/3)14	24
図16 SE41・SK46出土遺物 (1/3)15	25
図17 SK52・54・56・59・60出土遺物 (1/3)16	26
図18 ピット・遺構面出土遺物 (1/3)17	27
図19 各遺構出土断面拓形 (2/3)18	28
図20 人の頭が施かれた土製品 (1/3)裏表紙	29

写真目次

写真1 第1面全景 (北西から)20	21
写真2 第2面全景 (北西から)20	21
写真3 第2面東側 (北西から)20	21
写真4 第1面SK01 (北西から)20	21
写真5 SX02・SK46表面状況 (北西から)21	21
写真6 SK46先端状況 (北西から)21	21
写真7 SK10・40 (北西から)21	21
写真8 SK15 (北から)21	21
写真9 SK36 (南西から)21	21
写真10 SE41 (北から)21	21
写真11 SK59・60 (西から)21	21
写真12 SK25・26・38 (西から)21	21

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成19(2007)年4月18日にMIDファシリティマネジメント株式会社より、福岡市博多区冷泉町46番におけるホテル建設の為の埋蔵文化財事前審査願い(事前審査受付番号19-2-54)が福岡市教育委員会に提出された。申請地は1993年に調査を実施した第79次調査地点で、駐車場として利用されていたが、今回再申請があったため、計画を審査したところ、建築計画範囲に前回未調査であった部分が含まれていた。その範囲について再度確認調査を行い、遺構を確認したので、その取り扱いについて事業者側と協議を行い、調査費用を事業者が負担するということで調査を行うこととなった。調査は先行して工事用鋼矢板を打ち、試掘成果を基に表土掘削を行い、その後は事業者側が場外持ち出した。調査中の廃土は申請地内に仮置きした。本調査は平成19年10月15日から10月31日まで行った。調査実施面積は65m²である。調査報告書作成作業は平成20年度に実施した。

調査にあたっては、申請者のMIDファシリティマネジメント株式会社、工事担当の鹿島建設株式会社、西海地研株式会社の方々に調査費用の負担、重機や現場事務所の提供などで多大な協力を受けた。記して感謝の意を表す次第である。

2. 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託

鹿島建設株式会社九州支店
支店長 日下部 茂人

調査主体

福岡市教育委員会

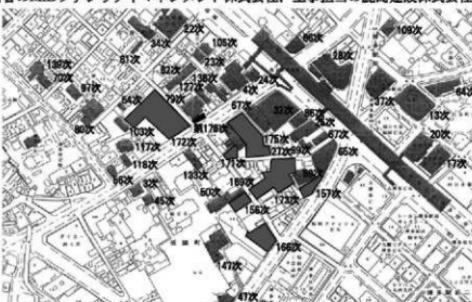


図2 第178次調査地点位置図 (1/6,000)

調査総括 文化財部埋蔵文化財第2課長 力武 卓治（前任） 田中 寿夫（現任）
 埋蔵文化財第2課調査第1係長 杉山 富雄
 事務担当 文化財管理課管理係 鈴木 由喜（前任） 古賀とも子（現任）
 調査担当 埋蔵文化財第2課主任文化財主事 山崎 龍雄
 調査作業 近藤由美、真田弘二、土橋一則、徳永洋二郎、西野光子、森弘品子、森下初美、吉田哲夫
 整理作業 井上朝美、木藤直子

第Ⅱ章 調査の記録

1. 調査の概要（図2・3）

調査地は博多遺跡群の南部に位置する地点である。調査地の歴史的環境については、第79次調査報告書（福岡市埋蔵文化財調査報告書第447集）で述べられているので、本報告では割愛する。今回の調査は試掘成果に基づき-1.3mの暗褐色砂面まで重機で削削し、遺構検出を行った。調査面は2面で、第1面は西側第79次調査区の第3面、第2面は第5面に該当する。第1面は中世で12～14世紀頃、第2面は古代～中世の時期である。調査地が畑として利用されていた場所であり、埋土は比較的軟質で締まっていなかった。第1・2面の検出遺構は井戸、土坑、土器廃棄土坑、ピットなどである。

2. 第1面の調査（図4、写真1）

① 井戸（SE）

SE08・09（図8） 近世から近代の井戸で、調査区南東隅で検出した。いずれも未完掘。掘方は円形で、井側はSE09が瓦組、SE08は不明。1・2はSE08出土。1は素焼きの土鉢。2は型押成形の磁器水滴。上面は菊花を彫り出す。17世紀後半。葉部は緑色を塗る。3～6はSE09出土。3～5は底部糸切りの土師器小皿・杯。3は口径8.1cm、4・5は口径12.2cm・16.0cm。6は肥前陶器碗。内面に砂目跡が残る。7はイルカの尾椎骨。直徑4.6cm、高さ3.3cm。表面は風化し、底面には切断痕、上面には犬の咬み痕が残る。

SE11（図5・8） 調査区中央部で検出した。底面で井筒状のピットを検出したので井戸とした。深さは井筒底で1.25mを測る。埋土は上層が黒褐色粘質土で炭化物・焼土を含み、下層はオリーブ黒色土で浅黄色砂を含む。出土遺物は中世の土師器や中国産陶磁器、古代の須恵器などがある。8～11は土師器、8～10は底部糸切りの小皿で口径7.4～9.5cm。9・10は板状圧痕が残る。11は底部糸切りの杯、口径12.4cm。12は白磁皿I a類、口径12.4cm。13は建窯の天目I-1類。光沢のある黒色釉がかかるが、口縁部釉色は灰黄褐色を呈す。14は大型の甕口縁部。外側面黒褐色釉上にオリーブ釉がかかり、胴内面同心円状の當て具痕が残る。出土遺物から13世紀前半頃の遺構と考える。

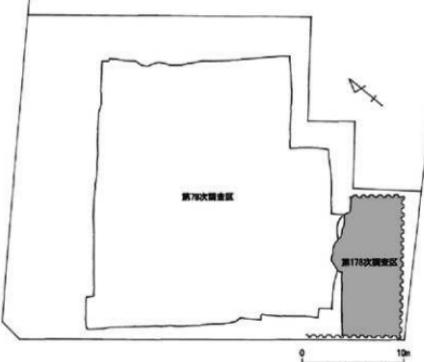


図3 調査区配置図 (1/400)

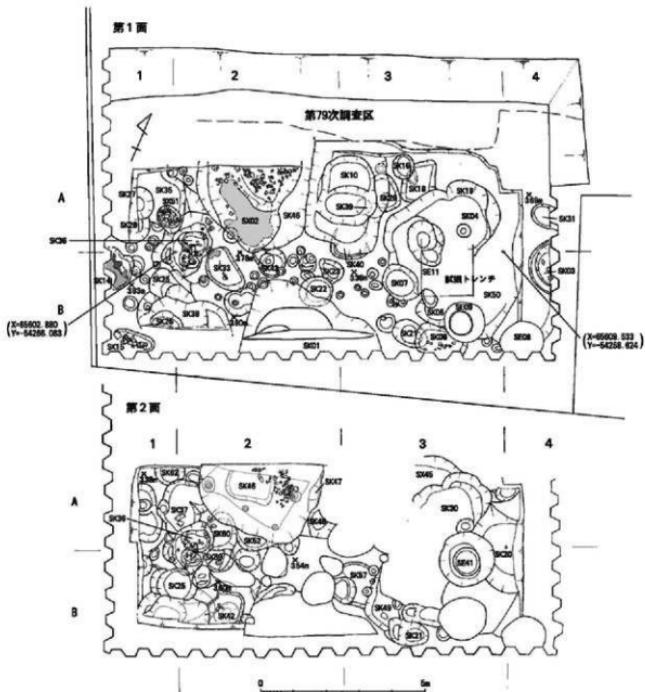


図4 第1面・第2面遺構全体図 (1/125)

※座標値は旧日本測地系数値

② 土坑 (SK)

SK01 (図5・9、写真4) 南側鋼矢板にかかって検出した大型の土坑。確認規模は長軸長4.0m、深さ1.0mを測る。調査区まで未完掘。埋土は上層が暗黒褐色土、下層は上層土に黄褐色砂を混入する。出土遺物は中世の土師器、中国産輸入陶磁器、中国鏡、古代の土師器や須恵器などがある。15～17は底部糸切りの土師器。15は小皿、口径8.8cm。16・17は坪、口径14.0cm・15.0cm。18～24は白磁。18は碗VII類、19は碗IV類。口径18.4cm・16.0cm。20・21は白磁皿IV類。20は口径10.0cm、見込み蛇ノ目輪剥ぎ。22は水注把手。23は合子身。黄褐色雜を外底部以外施釉。24は宝珠形を呈す蓋の摘み。25は高麗の象眼青磁片。以上は上層出土。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半とを考える。

SK03 (図5・9) 東側境界の半円形の土坑。長軸長1.7m、深さ0.54mを測る。埋土は暗灰黄褐色土で下層は黒褐色土との混合で炭化物を含む。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器などがある。26～36は土師器。26～30は底部糸切りの小皿。口径7.6～8.8cm、器高1.0～1.5cm。27は板状圧痕が残る。31～36は底部糸切りの坪。口径11.8～17.2cm、器高2.0～3.5cm。37～39は白磁。37は碗IV類の底部。

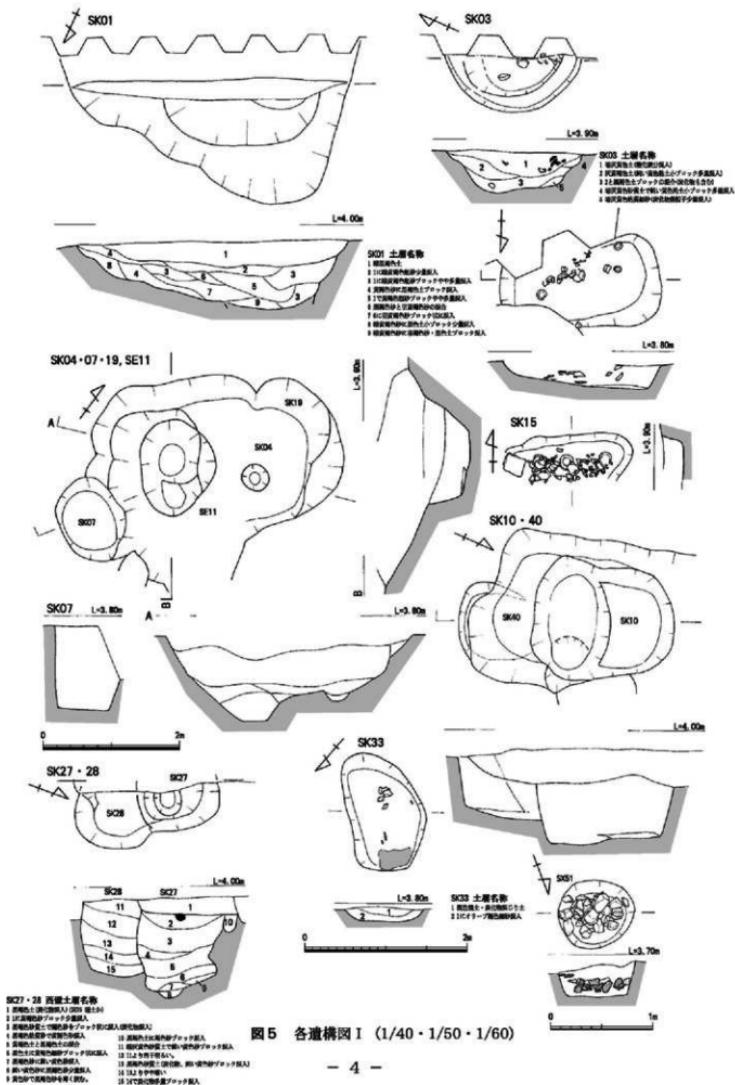


図5 各造機図 I (1/40・1/50・1/60)

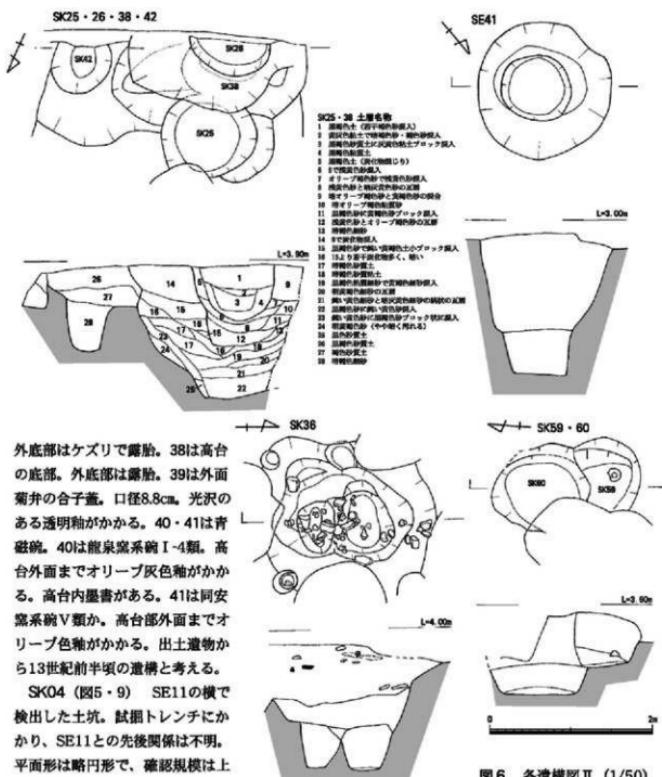


图 6 各造模图 II (1/50)

外底部はケズリで露胎。38は高台の底部。外底部は露胎。39は外面菊井の合子蓋。口径8.8cm。光沢のある透明釉がかかる。40・41は青釉胎。40は龍泉窑系碗I・41は高台外面までオリーブ灰色釉がかかる。高台内墨書きがある。41は同安窑系露胎V類か。高台部外面までオリーブ色釉がかかる。出土遺物はE13世纪前半期の遺構と想える。

SK04(図5・9) SE11の横で検出した土坑。試掘トレンチにかかり、SE11との先後関係は不明。

平面形は略円形で、確認規模は上面で幅2.1m、深さ約0.9m、底面

中央には径0.4m、深さ0.15mのピットがある。埋土は暗黄褐色土で、炭化物・焼土ブロックを含む。

出土遺物は中世の土師器類、中国産陶磁器、古墳時代～古代の土師器、須恵器がある。42は白磁碗皿類。43は同室窓系青磁盤・II-2b類。外底部無難。44は青磁の小壺底部。灰オリーブ釉の施釉だが、外底部純い赤褐色釉。45は型押成形の青白磁合子蓋。口径5.4cm。天井部印花で体部は菊弁。内面露胎。46は不明滑石製品。方形で1.8×1.9cm、厚み0.6cm。調整はケズり後擦り。出土遺物から12世紀頃の造機と考える。

SK05(図9) B-3区のSE09に切られる不整円形土坑。埋土は暗黒褐色土。出土遺物は中世の土。

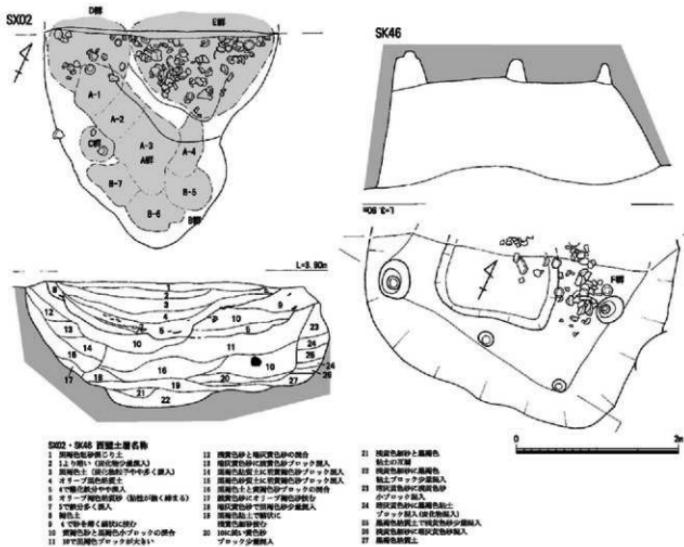


図7 SK02、SK46 (1/50)

器物、瓦質土器、中国産陶磁器、古代以前の土師器、須恵器があるが、上層は近世遺物を含む。47～53は土師器。47～50は小皿。口径7.0～9.1cm、器高1.0～1.3cm。47・50は底部糸切り。51～53は底部糸切りの坏。口径11.6～12.8cm。54～56は青磁。54は粗雑な青磁碗か皿の底部。外底部は無釉。55は壺の底部か、高台外面まで灰オリーブ色釉がかかるが、高台内は鉄漿を塗ったのか灰黄褐色を呈す。56は壺底部。暗オリーブ釉がかかるが高台部は露胎。13世紀末～14世紀前半頃の遺構と考える。

SK06(図9) B-3区境界地検出の隅丸長方形の土坑。長軸長1.57m、短軸長0.86m、深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色土で炭化物を含む。完形に近い土師器小皿が出土しており、墓の可能性がある。出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産陶磁器、滑石石銅片、古代以前の土師器、須恵器などがある。57～63は底部糸切りの土師器。57～59は小皿。57・58は完形。口径7.8～8.1cm、器高1.3～1.5cm。59は板状压痕が残る。60～63は坏。60はほぼ完形。口径11.6～12.3cm、器高2.3～2.8cm。出土遺物から13世紀後半頃の遺構と考える。

SK07(図5・10) B-3区のSE11に切られる平面梢円形の土坑。残存部で長軸長1.3m、深さ1.24mを測る。埋土は暗褐色砂。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、滑石石銅片、古代以前の土師器、須恵器がある。64は土師器小皿。口径9.0cm。底部糸切りで板状压痕が残る。65・66は白磁碗IX類。65は底部。66は口径15.0cm。内底は蛇目目刺輪。66は体部下半から底部は露胎。67は同安窯系青磁碗底部で「林十」と書かれた墨書がある。68は磁灶系系の陶器の蓋。口径18.4cm、器高6.1cm。天上部にオリーブ釉が施釉。64～66は上層、67・68は下層出土。出土遺物から12世紀後半頃と考える。

SK10(図5・10・19、写真7) A-2・3区で検出したSK40・29を切る平面形が梢円形を呈す土坑。

規模は長軸長2.66m、短軸長2.1m、深さ1.4mを測る。底面は二段掘りで南側が一段梢円形状に深くなり、造構の切り合いの可能性があるが、平面では確認出来なかった。埋土は黒灰色土で炭化物や焼土粒を含んでいた。調査時は井戸の可能性も考えたが、井筒は検出出来なかった。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、滑石製石鏡、鉄津と古代の土師器、須恵器などがある。69～73は土師器小皿、口径8.4～9.6cm、器高0.9～1.3cm。底部糸切りで69・71・72は板状圧痕が残る。74は土師器坏、口径14.8cm、器高2.2cm。底部糸切りで板状圧痕が残る。75は土師質で鈎が付く鍋。外面は粗いナデースが付き、内面ケズリ後ナデ。76～79は白磁碗。76はV-1類、口径16.6cmを測る。内面模描文。77は底部で見込み蛇目粒剥。78・79は白磁碗底部に書かれた墨書き土器。78は「德(花押)」か、79は「口弘丸」か。80～82は白磁皿。80・81はIX-1類、口径9.2cm・10.0cm、器高2.4cm・2.2cm。全面施釉。82は皿の底部。高台内に墨書きが残る。83・84は龍泉窯系青磁碗。83は明銀灰色釉がかかるが、疊付は露胎。84は碗I-6a類、片切彫りによる鋸鉢弁。85～89は龍泉窯系青磁皿類。口径10.8～13.2cm。全面厚めの施釉で、高台疊付は紙幣を塗る。85はIII-4類、86・87はIII-5類。88・89は蓮弁鉢で88はIII-7類。89はIII-6類。90・91は青白磁皿類。90は見込みに印花文がある。91は見込みに片切彫りと模描文が入る。92は天目碗2b類。口径11.5cm、器高5.6cmを。93は綠釉の陶器底座。オリーブ黄色釉を内外面施釉。底部目跡痕が残る。94は断面方形の釘又は棒状の不明鉄器。残存長13cm、直径0.6cm。357は北宋銭の天聖元寶(1023年初鋤)2枚が銹着。69～81・83～86・88～92・94は上層出土、82・87・93は下層出土。出土遺物から13世紀中頃～14世紀初頭の造構と考える。

SK 15(図5・10、写真8) B-1区境界隅の長梢円形の土坑。確認規模は長軸長1.28m、幅0.5m、深さ0.22mを測る。西側は後世の角石があり、染付が出土している。土師器片が多く出土で施釉土坑。埋土は黒褐色土。出土遺物は中世の土師器皿・坏が多いが、中国産陶磁器などがある。95～102は底部糸切りの土師器坏。95～101の口径12.8～13.4cm、器高2.7～3.3cm。102は大型で口径16.3cm、器高

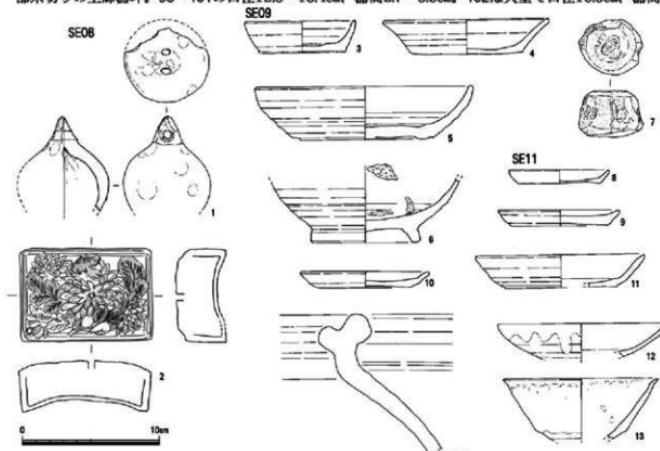


図8 SE08・09・11出土遺物(1/3)

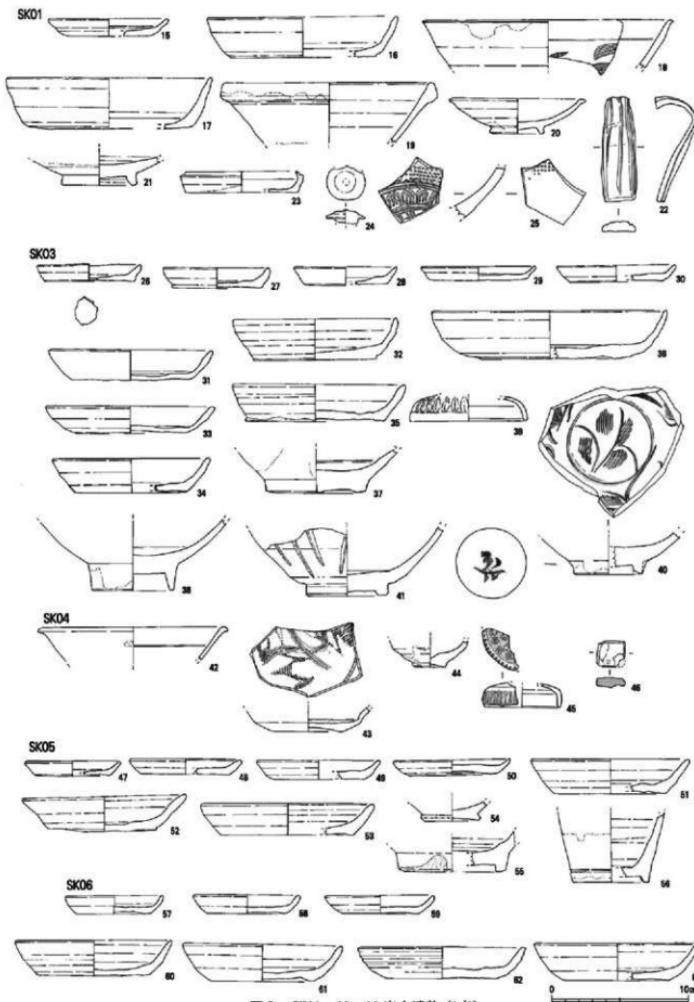


図9 SK01・03～06出土遺物(1/3)

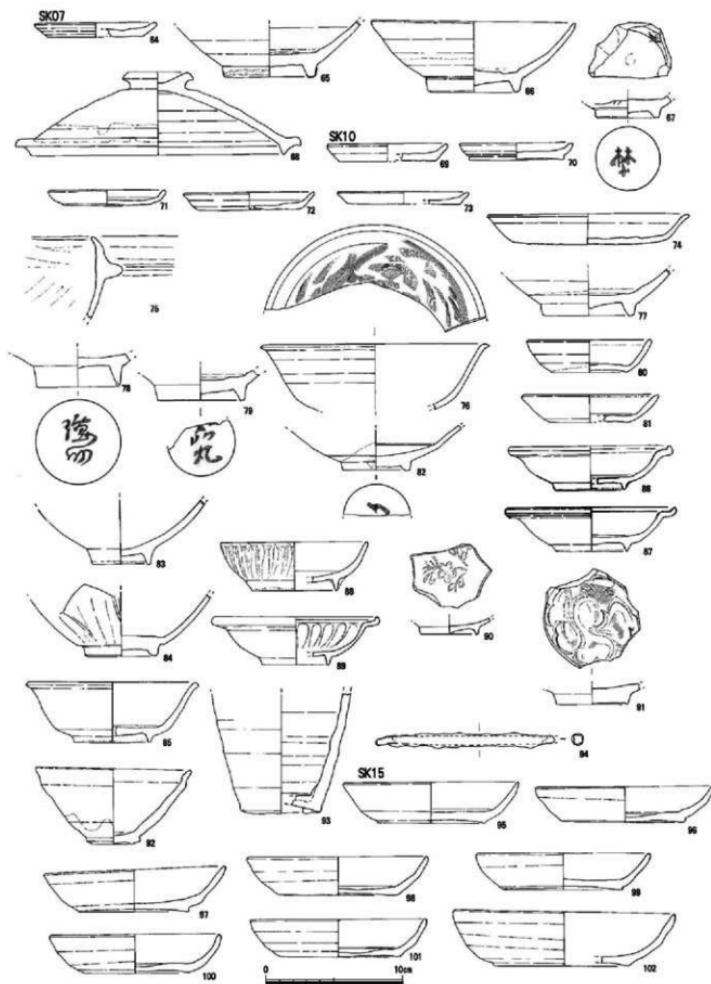


图10 SK07・10・15出土遗物 (1/3)

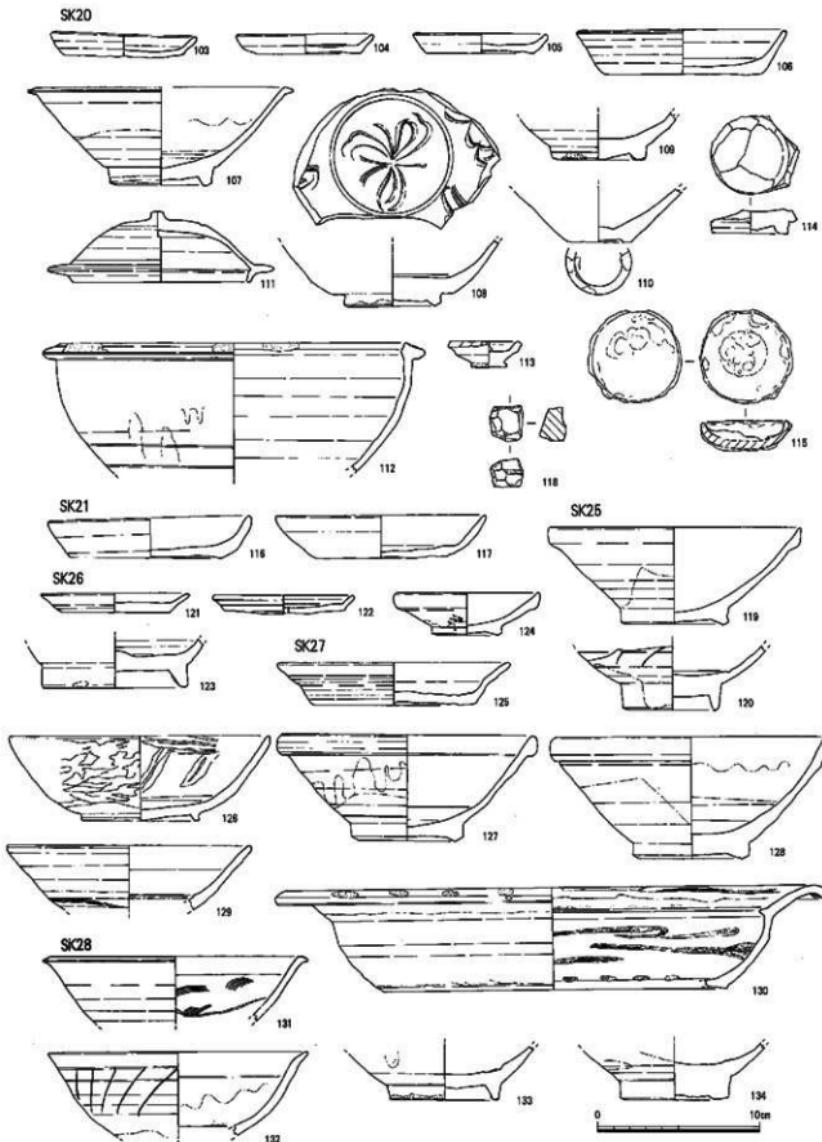


図11 SK20・21・25・26・27・28 山土遺物 (1/3)

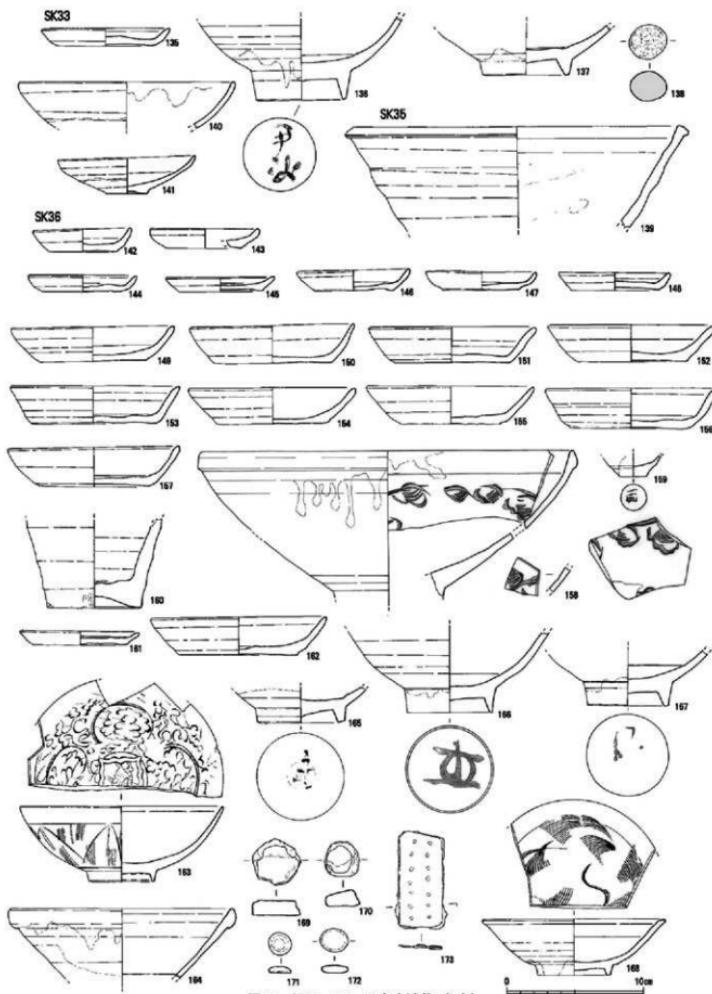


圖12 SK33・35・36出土遺物（1/3）

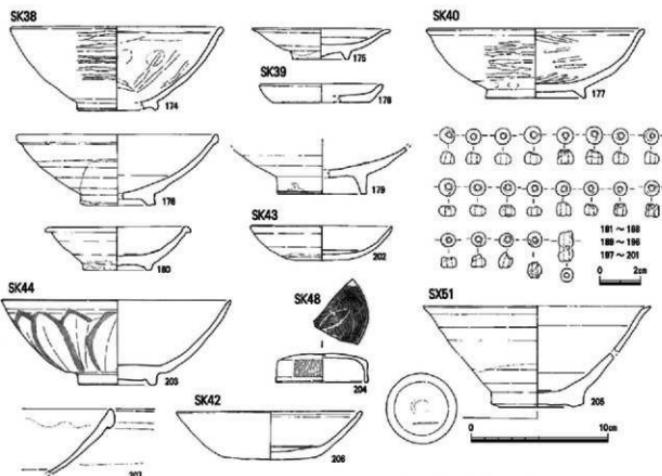


図13 SK38~40・42~44・48、SK51出土遺物 (1/3・1/2)

4.2cm。出土遺物から13世紀前半の造構と考える。

SK20(図11・19) A・B-3区で検出の大形土坑。SE09、SK04と切り合い全容は不明。埋土は暗灰黃褐色、浅黄色粘土、オリーブ褐色砂が主体で炭化物・焼土粒子などを含む。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、古代の土師器、須恵器などがある。103~106は底部糸切りで板状圧痕が残る土師器皿と甕。103~105の口径8.3~9.0cm。器高1.2~1.3cm。106は口径13.0cm。器高2.7cm。107は白磁碗VI-2類。口径16.4cm。器高6.0cmを測る。外底部露胎。108は龍泉窯系青磁碗I-4d類底部。高台内は露胎。109は朝鮮青磁碗底部。高台部まで灰オリーブ色釉を施輪。高台に重ね燒痕がある。110は蛇目状高台の高麗青磁碗底部。疊付に目痕が残る。灰オリーブ色釉を施輪。111は青磁の蓋。天井部摘み、口縁内面はかえりが付く。口径11.0cm。器高4.4cm。外面に施輪。112は折り返し口縁の陶器鉢。口径23.6cm。黒褐色釉を内外面に施輪。口縁上面に重ね燒痕がある。113は茶入れの蓋。口縁打ち欠き。天井部黒褐色釉を施輪。底部は露胎。114は瓦玉。白磁皿IV類の再利用。115は鉄製の柱輪。口径5.7cm。器高1.8cm。表面に溶融した鉄が付着している。358は北宋銭の太平通寶(977年初鋤)。出土遺物から12世紀後半~13世紀前半の造構と考える。

SK21(図11) B-3区境界地。SK06に切られた精円形土坑。長軸長1.1m、深さ0.7mを測る。埋土は暗灰黃褐色砂質土。出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産陶磁器、瓦などがある。116・117は土師器甕。口径12.5cm・13.0cm。器高2.6cm。底部糸切りで板状圧痕が残る。118は瓦玉。白磁底部細片を利用したもの。造構の時期は13世紀前半頃と考える。

SK25(図6・11、写真12) B-1区で検出した円形土坑でSK38を切る。規模は長軸長1.6m、最大深さ1.4mを測る。埋土は暗黒褐色土で燒土・炭化物混入。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産

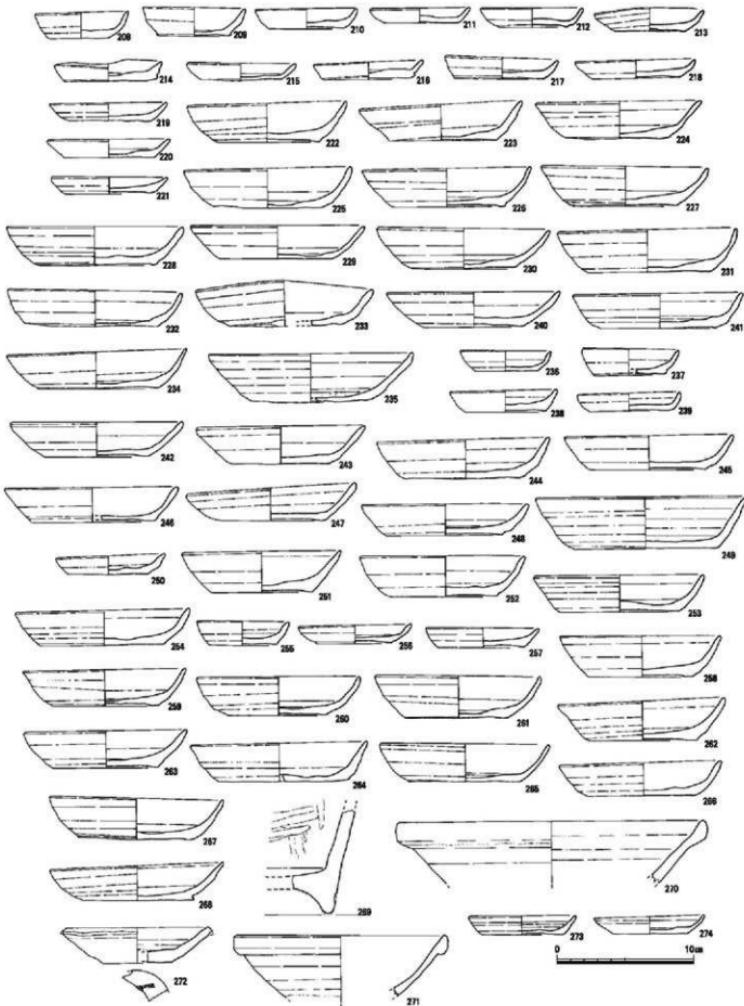


圖14 SX02出土遺物 I (1/3)

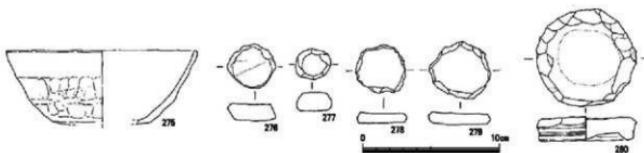


図15 SX02出土遺物II (1/3)

陶器、古代の土師器、須恵器などがある。119・120は白磁碗。119はIV類で口径15.4cm、器高5.9cm、底部露胎。120はVI-3c類の底部。外縁の線彫り。出土遺物から12世紀後半の遺構と考える。

SK26(図6・11、写真12) B-1区で検出した調査区にかかる円形土坑。規模は縦面で幅0.9m、深さ0.65mを測る。埋土は黒褐色土が主体で下層は粘質土となる。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶器、古代須恵器など。121・122は土師器小皿。口径9.2cm・8.8cm、器高1.2cm・1.1cm。底部糸切りで板状圧痕が残る。123は白磁碗底部。高台内面まで厚めの施釉。高台内付着物あり。124は白磁皿II類。口径9.2cm、器高2.6cm。高台部露胎。

SK27・28(図5・11) SK27はA-1区境界で検出した半円形土坑。SK28を切る。規模は土層断面から1.05m、深さ1.2mを測る。土層で見ると上層SK35が入る。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶器、古代の土師器、須恵器などが出土。125は土師器壺。口径14.4cm、器高2.6cm。底部糸切りで板状圧痕が残る。126は瓦器壺。口径16.4cm、器高5.2cm。外縁ヘラミガキ。127～129は白磁碗。127・128はIV類。口径16.2cm・16.8cm、器高6.5cm・7.4cm。外縁部下半から底部は露胎。129はIX類で、口径15.2cm。130は磁社窯系の黄釉鐵輪盤。口径34.0cm、器高6.8cmを測る。軸下に敷繪が描かれる。以上は中・下層出土の遺物。SK28はSK27に切られる土坑で、深さは0.95mを測る。暗灰黄色砂質土で下層炭化物を含む。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁、青磁、陶器、動物骨、古墳・古代の土師器、須恵器などがある。131～134は白磁碗。131はVII類、132はVI類で、口径16.4cm・16.2cm。133・134は底部で見込みは蛇ノ目釉割ぎ。SK27・28の時期は13世紀初頭と12世紀前半頃と考える。

SK33(図5・12) B-2区で検出した不整形の土坑。長軸長1.44m、短軸長0.93m、深さ0.16mを測る。北端に炭化物が集中する。埋土は黒褐色土で炭化物などを含む。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶器などがある。135は土師器小皿。口径9.5cm、器高1.3cmを測る。底部糸切り。136・137は白磁碗。136は高台内に「尹(略押)」と書かれた墨書きがある。137はVI類の底部。138は石球。直径2.7×2.4cm。遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SK35(図12) A-1区で検出したSK27・28を切る土坑。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶器、古代の土師器、須恵器などがある。139は中世須恵器の魚住窓の鉢。口径25.0cm。12世紀中頃のもの。140は白磁碗。口径16.0cm。141は白磁皿II類。口径10.2cm。外底部は露胎。出土遺物から12世紀前半～中頃の遺構を考える。

SK36(図6・12、写真9) A-2区で検出した土坑。他遺構に切られるが、確認規模は長軸長2.2m、短軸長約2mを測る。底面は2基のピットが連なったような状況を呈し、それぞれの深さは上面より1.57m、1.50mを測り、浅いピットをP1、深いピットをP2とする。上面には礫を含む土器群があった。埋没後に堆積したものであろう。出土遺物は中世の土師器、中国産陶器、瓦器、古代の土師器、須恵器などがある。142～160は上層土器群出土。142～157は土師器。142～148は小皿。口径7.3～8.3cm、器高1.0～1.7cm。149～157は壺。口径12.0～12.6cm、器高2.5～3.0cm。小皿・壺とも底部は

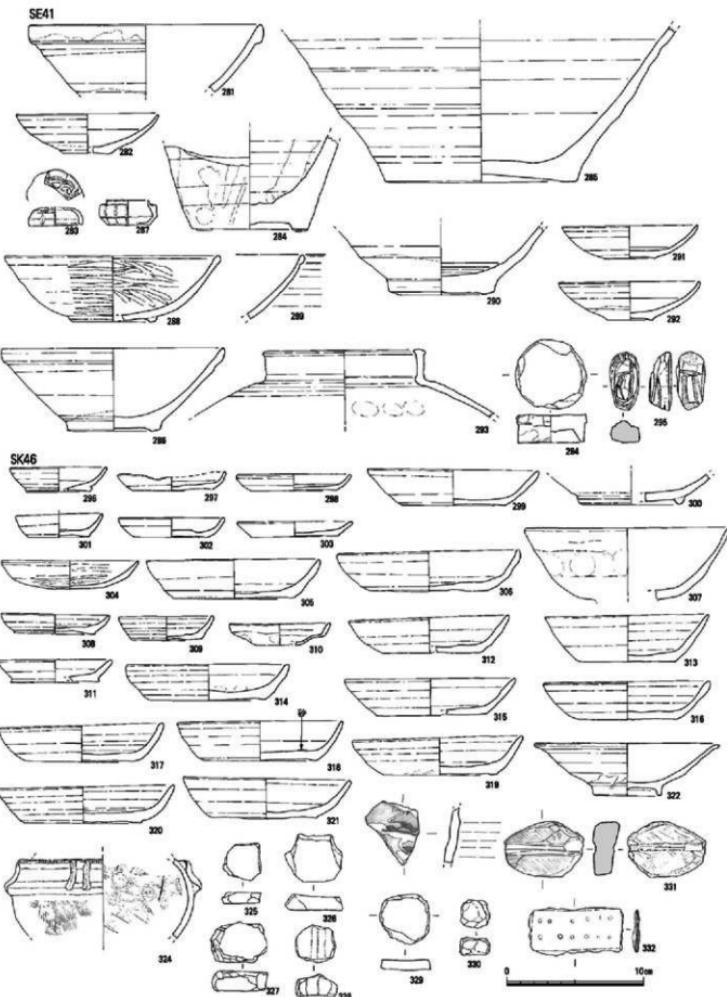


圖16 SE41、SK46 出土遺物 (1/3)

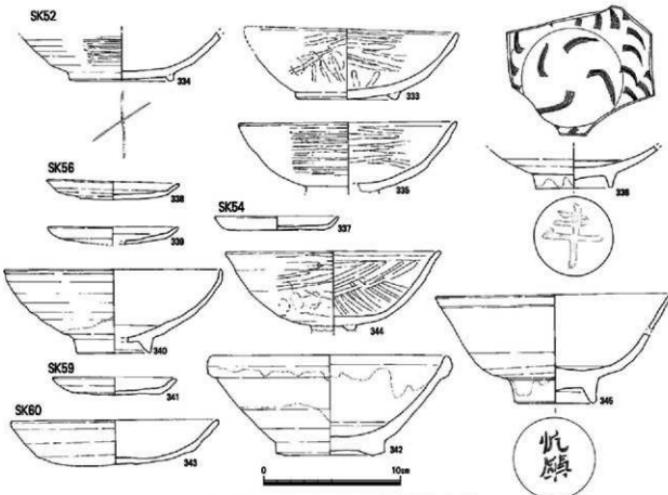


図17 SK52・54・56・59・60出土遺物(1/3)

糸切りであるが、板状圧痕が残るものは少ない。158は広東省産の白磁大碗。口径27.6cm。ヘラ片切り施文で、灰白色釉を施すが釉を二重に掛ける部分もある。SK27の中層出土破片と接合。159は陶器小壺底部で墨書「一綱か」がある。160は陶器壺底部。黒褐色釉の全面施釉で、底部重ね焼き痕跡と砂粒が付着。161～163は土器群下出土。161は土器小皿。口径8.8cm。器高1.0cm。162は土器器坏。口径13.0cm。器高2.8cm。161・162共底部糸切りで161は板状圧痕が残る。163は輪花の白磁碗。口径15.0cm。器高5.5cm。外面簡略な蓮弁と柳描き、内面はヘラによる文様と見込み中央に鹿のスタンプがある。疊付露胎で砂粒付。福建省南部の漳平窯に類似品がある。164～168は上面出土の白磁碗。164はIV類で口径16.2cm。165～167は墨書土器。165・167は薄く不明、166は「匱」。168は白磁碗X類。口径13.4cm。器高4.0cm。外底は露胎。169・170は瓦玉。169は上面、170は土器群下出土。169は瓦質の布目瓦片を再利用、170は瓦片を再利用したもの。171・172は基石。径1.5cm・2.0cm。171は白石で貝製、172は黒石で粘板岩製か。173は鉄製の鍔の小札。長方形で3.2×6.9cm。糸通し孔が2列各7個ある。出土遺物から13世紀後半代の遺構と考える。

SK38～40(図5・6・13、写真7・12) SK38はSK26下層の土坑。深さは約1mを測る。出土遺物は中世の土器器、白磁など。174は瓦器柄。口径15.6cm。器高6.1cm。内外面ナデとヘラミガキ。175は白磁皿IV類。口径10.0cm。器高2.3cmを測る。高台部は露胎。SK39はSK10の底束削で検出した。175は土器器皿。口径9.0cm。器高1.4cm。底部糸切り。SK40はA-2・3区で検出したSK10に切られる円形土坑。残存規模は長軸1.5m。深さ0.95mを測る。埋土は暗褐色砂が主体。出土遺物は中世の土器器、中国産陶磁器、瓦、釘、ガラス小玉などがある。177は土器器柄。口径16.0cmを測る。178は白磁碗II類。口径14.6cm。器高5.3cm。体部外下面下半は露胎。179は青磁碗底部。オリーブ色釉の施釉であるが疊付は露胎で、内面粘土目跡が残る。180は朝鮮王朝の青磁碗小皿。口径10.6cm。器

高3.2cm。灰オリーブ色の釉が厚く厚かかり、見込み4か所の胎土目、高台疊付は露胎。181～201はガラス小玉。直径0.65～0.8cm、高さ0.45～0.7cm。孔径0.3cm前後で、色調は白濁したナイルブルーが多く、2個の玉が接合したものがある。SK40の時期は11世紀後半頃と考える。

SK43・44(図13) SK43はB-2区検出の不整円形を呈する土坑。規模は0.88×0.78m、深さ0.56mを測る。出土遺物は中世の中国産白磁・陶器や古代の土師器、須恵器がある。202は白磁皿II類。口径10.4cm、器高2.5cm。外底部は露胎。SK44はA-3区のSK04に切られる土坑。出土遺物は中国の青磁と陶器片がある。203は龍泉窯系青磁碗I-6類。口径17.0cm、器高6.2cm。疊付重ね焼き痕が残る。

SK48(図13) SK10南側で検出した土坑。残りは不良。出土遺物は中世の土師器、中国産陶磁器、古墳時代から古代の土師器、須恵器などがある。204は青白磁合子蓋。口径6.8cm、器高2.1cmを測る。天井部は壓押による魚と海草文、内面は露胎。

③ その他の遺構 (SX)

SX1(図5・13) A-1区で検出した円形土坑。規模は0.65×0.75m、深さ0.35mを測る。中に火成岩や堆積岩の割石や自然石などの礫群があった。出土遺物は中世の土師器、中国産陶磁器、古代の須恵器などがある。205は白磁碗。口径16.6cmを測る。高台の割りは浅いが、口縁がやや外反する形態。体部下半から底部は露胎。「一」と書かれた墨書きが残る。出土遺物から12世紀代と考える。

SX02土器廻棄土坑(図7・14・15・19、写真5) A-2区で検出した土師器廻棄遺構。SK46が半ば埋まつた段階で土師器が廻棄されている。南側から投げ込まれたようである。遺物は大きく上(南A・B群)下(北D・E群)2グループで取り上げた。土師器の形態はほぼ同じである。壺蓋に使用され、廻棄されたものであろう。主なものを報告する。出土遺物は中世の多量の土師器壺・小皿と瓦器、瓦質土器、中国産陶磁器、瓦、古代の土師器、須恵器などがある。土師器壺は小皿に比べ、圧倒的に多い。208～268は土師器小皿・壺。いずれも底部糸切りで少數に板状压痕が残る。法量は計測のにも含めている。208～235はA群出土、208～221は小皿。口径6.8～9.0cm、器高1.1～2.2cm、222～235は壺。口径11.8～15.1cm、器高2.6～3.3cm。236～249はB群出土土師器、236～239は小皿。口径6.7～8.0cm、器高1.3～2.0cm。240～249は壺。口径11.7～15.6cm、器高2.3～3.8cm。250～254はD群出土。250は小皿で口径8.1cm、器高1.5cm。251～254は壺。口径11.7～12.2cm、器高2.9～3.0cm。255～269はE群出土。255～257は小皿。口径6.7～8.3cm、器高1.4～1.8cm。258～268は壺。口径12.0～12.8cm、器高2.3～3.1cm。269は瓦質土器の火鉢底部。表面は丁寧なナデ仕上げ。黒により赤く焼け剥離している部分がある。270はA-4区出土の中世須恵器の鉢。口径22.8cm。271・272は白磁。271は碗IV類。

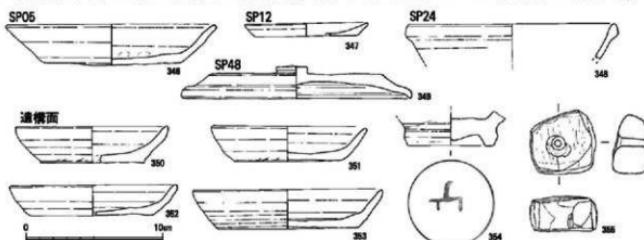


図18 ピット・遺構面出土遺物 (1/3)

口径15.8cm。272は皿X類。口径10.5cm、器高2.6cm。底部に墨書きが残る。273・274は土師器小皿。273は上面、274は下層出土。口径7.9cm・8.0cm、器高1.3cm・1.6cm。275は瓦器椀。口径14.0cm。外面ナデで指圧痕が残る。276～280は瓦玉。276は土師器。277は瓦。278は須恵器。279は土師器、280は白磁碗の破片の転用品。359は北宋錢の嘉祐元寶（1056年初鋤）、360は政和通寶（1111年初鋤）の折二銭。278・279は下層出土。出土遺物から13世紀後半～14世紀前半の遺構と考える。

3. 第2面の調査（図4、写真2・3）

① 井戸状遺構（SE）

SE41（図6・16、写真10） A・B・3区のSK20底で検出した井戸。平面形は円形で、規模は直径1.64m、最大深さ1.73m（標高1.1m）を測る。壁上面より深さ1.2m程で平坦になり、そこで径0.8m×0.9mの円形の井筒を検出した。井戸枠は残っていないが木質の痕跡が残る。井戸底は温氣気があった。壁面は標高2.2mで砂礫になる。出土遺物 281～285は井筒内出土。281は白磁碗IV類、口径17.2cm。282は白磁皿II類。口径10.4cm、器高2.9cm。外底部露胎。283は型打ちの輪花状の青白磁合子蓋。口径3.9cm、器高1.3cm。内外面施釉。284は灰オーリープ輪施釉の陶器蓋底部。285は褐釉陶器蓋底部。黄灰色～黒褐色釉の薄めの施釉。外底部露胎。286～295は掘方出土。286・287・294は中層出土。286は白磁碗IV-1類、口径16.4cm、器高6.1cm。外底部は露胎。287は青白磁合子身。口径3.0cm、器高1.8cm。大きさ形態から283と対か。294は瓦玉。白磁碗底部を再利用したもの。288～293・295は下層出土。288は瓦器椀。口径15.8cm、器高4.8cm。内外面ヘラミガキ。289は白磁碗II類口縁部片。290は白磁碗IV-1類底部。体部下半は露胎。291・292は白磁皿II類。口径10.0cm・10.4cm、器高2.4cm・2.8cm。外底部露胎。293は磁灶窯系陶器蓋。口径11.0cm。釉は剥落したのか無釉。295は不明滑石製品。長さ4.3cm、幅2.1cm。表面はケズリ後ケンマ仕上げ。出土遺物から11世紀後半～12世紀前半の遺構と考える。

② 土坑（SK）

SK42（図6・13） B-2区第2面で検出したSK65に切られる土坑。南壁土層で深さ0.5m程を測る。底面に灰・炭化物・焼土が集中して出土している。出土遺物は中世の瓦器、中国産白磁・陶器、古代の土師器、須恵器などがある。206は土師器壺。口径13.6cm、器高3.6cm。外底部同心円状にナデル。207は白磁碗IV類口縁部片。出土遺物から12世紀前半以前と考える。

SK46（図7・16、写真6） 第1面の土器窯業遺構SX02下で検出した地下式倉庫遺構。北側は境界にかかり全体は不明。平面形は上面で隅丸長方形、底面は長方形を呈す。確認規模は上面で長軸長3.6m以上、短軸長2.8m以上。底面は長方形で長辺2.6m、短辺1.9m以上で、深さ1.34mを測る。底面はほぼ平坦で周壁際に沿って打込まれていたと思われる板材の痕跡が黒く残り、各隙と各壁際間に径0.15～0.35m、深さ0.3～0.5mを測るビットがある。ビット内には径0.1m程の柱痕跡があった。又、床面中央は方形状の深さ0.1m程の浅い落込みがある。埋土は黄褐色砂と黒褐色土の混合土が主体で、底面は黒褐色粘質土。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、鉄滓、古代以前の土師器、須恵器などがある。296～300は上層出土の土師器。296～298は小皿。口径7.0～8.2cm、器高1.2～1.8cm。299は壺。口径12.6cm、器高2.7cm。300は椀底部。体部はヘラミガキ。301～307は中層出土。301～306は土師器小皿・壺。301～304の口径6.3～10.1cm、器高1.1～1.8cm。304は丸底で内外面丁寧なヨコヘラミガキ。305・306は壺。口径12.8～13.5cm、器高2.9～3.1cm。307は瓦器椀。口径15.0cm。体部は丁寧なナデであるが、外面指圧痕が残る。308～321は上層でF群として取り上げた土師器群。SX02に属するかも知れない。308～311は小皿。口径7.0～8.4cm、器高1.4～1.7cm。310は手捏ねで歪みがひどい。312～321は壺。口径11.8～13.1cm、器高2.7～3.6cm。以上の小皿・壺底部は糸切りで板状痕跡が残るものもある。322は白磁皿か浅い碗。口径13.4cm、器高3.8cm。高台は露胎。323は高麗象嵌

青磁瓶胴部片。324は弥生時代後期の長頸壺胴部片。突帯が二条付き、突帯間に縦の貼付け突帯が付く。内外面ハケ目。325～330は瓦玉。325～329は陶器片利用。330は砂岩製。全面粗い打欠き。331は滑石製石鍋転用の鍤。表裏両面に縫用の溝がある。最大長5.8cm、最大幅4.0cm。332は鉄製の鍤の小札。長さ6.7cm、幅2.9cm。X線写真では二列の紐通し孔がある。323・325～328・330は上層。331は中層。322・324・329・332は底面出土。出土遺物から13世紀中頃～13世紀後半の造構と考える。

各土坑出土遺物（図17） SK52はSK46南側のSX02下で検出した土坑。出土遺物は中世土師器、瓦器、中国産陶磁器、鐵滓など。333～335は瓦器輪。口径15.7～16.0cm。体部はヘラミガキ。334の高台部には「×」のヘラ記号がある。336は白磁碗Ⅷ類底部。高台内には判読不明の墨書がある。SK54はB-2区で検出した土坑。出土遺物は中世土師器、瓦器など。337は土師器小皿。口径9.1cm、器高1.1cm。底部糸切り。SK56はSK36に切られる土坑。出土遺物は中世土師器、瓦器、輸入陶磁器など。338・339は土師器小皿。口径9.6cm、器高1.3cm・1.5cm。底部ヘラ切りで板状圧痕が残る。340は白磁碗Ⅲ-2類。口径16.0cm、器高6.1cm。高台部ケズリで露胎。

SK59・60（図6・17、写真11） A・B-2区、SK36の西側で検出した土坑。いずれもSK36に切られ、且つSK60が59を切り新しい。いずれも平面形が円形で、深さ0.67mと1mを測り、SK60が深い。出土遺物は中世土師器、瓦器、輸入陶磁器、古代土師器、須恵器などがある。341・342はSK59出土。341は土師器小皿。口径9.2cm、器高1.3cm。底部ヘラ切りで板状圧痕が残る。342は白磁碗IV-1類。口径18.0cm、器高7.3cm。高台の割りは浅く露胎。343～345はSK60出土。343は土師器杯。口径15.2cm、器高3.3cm。底部丁寧なナデで板状圧痕が残る。344は土師器輪。口径15.8cm。体部内外面やや粗いヘラミガキ。345は白磁碗VI-1類。口径17.4cm。高台内に「兎口(舖か)」と書かれた墨書がある。出土遺物から12世紀前半の造構と考える。

③ 各面ピット・造構面出土遺物（図18・20）

346～349は第1面のピット。346はSP05出土の土師器杯。口径15.4cm、器高3.0cm。底部糸切り。347はSP12出土の土師器小皿。口径9.0cm。底部ヘラ切り後ナデ。348はSP24出土の白磁碗Ⅲ類。口径15.6cm。349はSP48出土の須恵器蓋。口径16.8cm。天井部回転ヘラケズリ。350～356は第1面造構面出土。350～353は土師器杯。口径11.2～13.8cm、器高2.6～2.8cm。底部糸切り。350・351は板状圧痕が残る。354は青磁碗底部。高台内に符号と思われる墨書がある。355は滑石製品。径0.6cmの孔がある。356は人の顔が墨書きされた一辺が直線を成す板状の土製品。残存長10.1cm、残存幅9.0cm、厚さ0.9cmを測る。顔が描かれている面は工具による同心円状のハケ目、胎土は良好。

4.まとめ

1. 今回は2面の造構面を調査した。時期は上面の第1面が12世紀～14世紀前半、下面の第2面が古代～13世紀頃である。古代の造構は中世の造構に切られ残りは不良、固化出来る遺物も少ない。ただ弥生時代後期の土器や古墳時代の土器片なども出土しているため、もともとあった可能性が高い。西に隣接する第172次調査では弥生時代の造構が検出されている。

2. 検出遺構は近世戸戸を除けば、11世紀～14世紀前半が多く、以後の造構は検出出来なかった。出土遺物もない。最新の造構はSX02やSK36などで、饗宴に使用された土師皿や杯が大量に廃棄されていた。当地点西側一帯は13世紀後半の文永・弘安の役以後、蒙古の再来襲に備え鎮西探題が北条氏によって設置され、それに合わせて博多の街の再整備されている。この鎮西探題は元弘3年（1333）鎌倉幕府滅亡時に、菊地氏らに攻められ探題館や周辺は灰燼に帰す。博多浜南辺一帯には14世紀後半以降、造構・遺物の見られない地区があるという（註1）。今回の調査区もそういう地域にあたるのではないかだろうか。SX02・SK36はそのころに近い造構であり、饗宴に使用された土師器を廃棄した

土坑や、鉢の小札の出土から、調査地が鎮西探題館に近い位置にあることが考えられる。

註1 大庭康時「考古学から見た博多の變遷」『中世都市博多を語る』（2008年海島社）

SK10



367

SK20



368

SX02



369

SK10



370



図19 各油樋出土銅鏡拓影 (2/3) 写真1



写真2



写真3

写真1 第1面全景 (北西から)
写真2 第2面全景 (北西から)

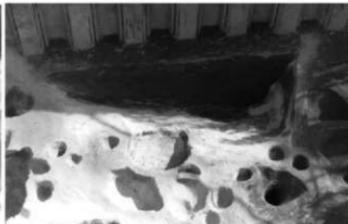


写真4

写真3 第2面東側 (北西から)

- 20 - 写真4 第1面SK01 (北西から)

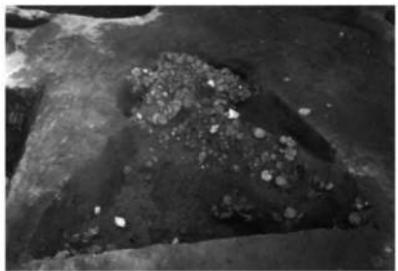


写真5 SK02 土師器表面状況（北西から）

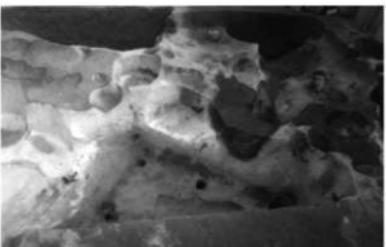


写真6 SK46 完掘状況（北西から）

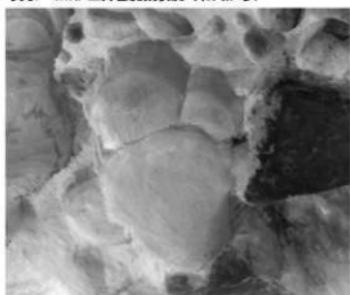


写真7 SK10・40（北西から）



写真8 SK15（北から）

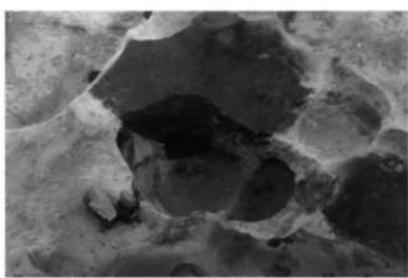


写真9 SK36（南西から）



写真10 SE41（北から）

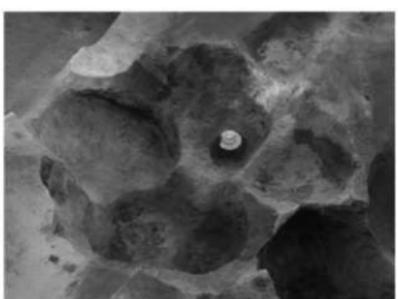


写真11 SK59・60（西から）



写真12 SK25・26・38（西から）



図20 人の顔が描かれた土製品 (1/3)

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多132						
副書名	－博多遺跡群第178次調査報告－						
巻次	132						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1044						
編著者名	山崎龍雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667						
発行年月日	西暦2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
福岡市博多区冷泉町 46番地	市町村: 遺跡番号: JA00130-KAMAK 46番地	40130 0121	33° 35' 37"	130° 24' 47"	2007.10.15～2007.10.31	65	ホテル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群 第178次調査	集落	古代、中世	古代-土坑+中世-溝+ 土坑+柱穴	古代-土師器+須恵器/中世- 土師器+中國産陶磁器+ 滑石製品+朱銭+鉄製品			
要約							

博多132

－博多遺跡群第178次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1044集

平成21年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アイオー企画印刷
福岡市南区柳原2丁目3番5号